

「東京湾大感謝」の意義と新たな体制に向けた課題

(一財) みなと総合研究財団 正会員 ○野口 孝俊
国土交通省関東地方整備局 岡島 達男
NPO 法人ハマの海を想う会 吉野 生也

1. はじめに

東京湾大感謝祭は、2013 年より開催された「東京湾水環境への再生」について取り組むべく、広く市民参加型とした環境イベントである。この取り組みは 2020 年・2021 年のコロナ禍の取り組みを含めて 10 年を経過し、一定の成果が得られた。今後、地球的な環境変化を含め新たな取り組みが求められ、環境意識として更なる深化が求められている。本稿は、10 年間の取り組みをまとめ、その意義と今後の実施体制について検討を行ったものである。

2. 東京湾大感謝祭の目的

2003 年に「東京湾再生のための行動計画」¹⁾ (2023 年から 3 期) を策定し、10 年計画で海域での対策(干潟・浅場整備)、陸域での対策(下水道整備)、環境モニタリングを行政主導で推進してきた。一定の成果は出たが、多様な分野への活動の広がりなどが課題となった。2013 年にスタートした第 2 期の行動計画では、第 1 期の反省を踏まえ、多様な主体が連携して問題の解決に向けた提案や提言を行う「東京湾再生官民連携フォーラム」²⁾ (以降: フォーラム) が設置された。そのフォーラムは具体的な活動として、9 つのプロジェクトチームが東京湾をテーマに活動をおこなっており、その活動の一つが「東京湾大感謝祭 PT」³⁾ (以降: 感謝祭) である。PT の成果としては、「東京湾各地で行われている様々なイベント等を集約・創出し、東京湾に触れあい、学び、楽しみながら、環境について学ぶ機会を提供する」ということで始められた。

3. 東京湾大感謝祭の実施概要と成果

東京湾大感謝祭というブランドが定着しているが、感謝祭の実施内容について表-1 に整理し、以下に示す。

(1) 来場者数

「東京湾の恵みを再生するのであれば、まずはその恵み感謝することから始めよう」からスタートした東京湾大感謝祭は、楽しく学ぶスローガンのもとに、イベント企画を中心として開催され、横浜港赤レンガ倉庫という、集客力の高い場所の効果もあり、2018 年には 2 日間で 10 万人を超える来場者に達するに至った。来場者数を見ても、海の環境に対する潜在的な関心の高さが伺え、当初の想定を上回り、水環境イベントとしては最大規模となった。

(2) 参加者(出展者)数

感謝祭への参加は、行政(環境省、国土交通省(保安庁・港湾・下水道)、水産庁、地方公共団体の港湾・下水道・水産・SDGs 部局)、民間(漁業者、マリコン、コンサルタント、環境企業、海洋レジャー企業、沿岸部企業、釣り企業など)、環境団体(NPO など)の 100 団体をを超える参加者が参画し、一体化として取り組んだ官民連携としての成果である。また、開催場所が、横浜市赤レンガ倉庫以外にも近接する大栈橋や周辺運河などの各所サテライトでの取り組みも実施できたのは、1 年間を通じて開催された実行委員会の調整があったことによる。感謝祭は、実行委員会方式により環境再生を図りたいという強い意志を持った、無償参加の集団の存在が大きな原動力である。

(3) 協賛社数

感謝祭への協力体制である共催(意義に賛同)、協力(人材・資材提供)、協賛(資金提供)は、当初から 60 団体を超えていたが、年々増加し、最大 70 団体をを超えるに至った。環境に対する意識が高いばかりではなく、東京湾の利用する者が多いことに起因する。東京湾は、京浜・京葉工業地域が広がっているが、残された干潟や東京湾海域では漁業者の利用もある。また、我が国を代表する大港湾が複数あり、近年では沿岸部で再開発された商業区域や沿岸部の居住区域も増加し、多くの者による多様な利用がされていることが協賛を生む大きな理由である。

キーワード 東京湾、環境再生、官民連携、環境意識

連絡先 〒105-0001 東京都港区虎ノ門 3 丁目 1-10 TEL 03-5408-8297

表-1 東京湾大感謝祭の変遷

回	開催年		会場		入場者数 (名)	出展者		報道取材	後援	協力	協賛
			開催地	施設		市民団体	行政・民間				
1	2013	平成25年11月23日	東京都江東区有明	青海タイム24ビル	1,200	13		—	無	無	無
2	2014	平成26年10月24～25日3日間	横浜市中区新港	横浜赤レンガ倉庫広場1号館3F	82,000	—	40	—	19	28	15
3	2015	平成27年10月23～25日3日間	横浜市中区新港	横浜赤レンガ倉庫広場1号館3F	88,000	16	51	TV5社新聞11社雑誌3社	19	28	15
4	2016	平成28年10月21日～23日3日間	横浜市中区新港	横浜赤レンガ倉庫広場1号館3F	98,000	20	86	TV9社ラジオ4社新聞16社雑誌2社	20	26	17
5	2017	平成29年10月20～22日3日間	横浜市中区新港	横浜赤レンガ倉庫広場10月18日のみ大栈橋ホール	25,000 1日目午後より台風、2日目中止	—	102	TV3社新聞2社雑誌3社	22	26	13
6	2018	平成30年10月18日、10月20日～21日4日間	横浜市中区新港 横浜市中区海岸通	横浜赤レンガ倉庫広場大栈橋ホール同時2会場開催	105,000	17	84	TV2社ラジオ1社新聞8社雑誌5社WEBmedia22社	29	16	13
7	2019	令和元年10月17日、19日～20日、26～27日5日間	横浜市中区新港 横浜市中区海岸通	横浜赤レンガ倉庫広場大栈橋ホール10月19～20日	101,000	17	86	TV3社ラジオ1社新聞11社雑誌7社WEBmedia4社	31	25	17
8	2020	令和2年10月1日～25日	WEB開催、連携企画はオフライン25日間	一部大栈橋ホール	ユーザー数: 13,603名 ページビュー数: 54,024PV	60		TV1社ラジオ3社新聞4社雑誌3社WEBmedia13社	34	無	無
9	2021	令和3年10月1日～31日	WEB開催、連携企画はオフライン31日間	一部大栈橋ホール	ユーザー数: 5,058名 ページビュー数: 13,562PV	54		新聞4社雑誌3社WEBmedia12社	無	無	無
10	2022	令和4年10月15日～16日2日間	横浜市中区海岸通 人数制限	大栈橋ホール	6572	15	42	TV3社ラジオ2社新聞4社雑誌2社WEBmedia5社	1	19	無

(4) 他地域への広がり

感謝祭の取り組みは、全国の閉鎖性の湾域環境再生に取り組む地域にも影響を与えている。三河湾大感謝祭は環境再生プロジェクトとして、愛知県主催により平成24年から9回開催され、湾全体の地域参加の動きも始まっている。青森県では、むつ湾感謝祭が2014年から開催され、青森市の駅前干潟や陸奥湾各所の環境イベントが継続して開催されている。ブルーインフラやカーボンニュートラルの展開を踏まえて、拡大する可能性があると思われる。

4. 東京湾大感謝祭の課題

フォーラムは、東京湾再生に係る現状や課題を理解・共有し、東京湾の魅力を発掘・創出・発信すること等により、東京湾再生の輪を拡げる活動に取り組み、政策提案を行うことにある。それを踏まえて感謝祭も「水環境の再生」を中心に、環境意識の向上のための取り組みを進めてきた。近年、東京湾の環境に影響を及ぼす海洋プラスチック問題や地球温暖化への対応としたCO2削減やカーボンニュートラル、ブルーカーボンの取り組みが動き出しており、東京湾の環境を取り巻く情勢が変化し、それに対応する動向の情報共有や発信への要請が求められている。

「お祭」開催による集客・認知度向上は大きいですが、東京湾再生に向けた「実際の行動」の広がりには寄与しにくい。更に、一部の行政主導による「お祭りイベント」というイメージが強くなり、コロナ禍によるオンライン開催となったこともあり、自治体の主体意識が希薄になった印象は否めない。また、現在では、「水環境」に特化した体制に留まっており、新たな環境課題に対する取り組み主体や若者の参加などが、今後の開催課題として挙げられる。

5. おわりに

2023年は新たな東京湾水環境再生計画の下で「流域3000万人市民の心を豊かにする東京湾の創出」に向けた感謝祭が予定され、新たな環境再生に向けた元年として開催されることが望まれる。

参考文献

- 1) 国土交通省関東地方整備局：東京湾水環境再生計画，<https://www.ktr.mlit.go.jp/chiiki/chiiki00000083.html>
- 2) 東京湾再生官民連携フォーラム：東京湾再生官民連携フォーラム，<http://tbsaisei.com/index.html>
- 3) 東京湾再生官民連携フォーラム：東京湾大感謝祭 PT，<http://tbsaisei.com/team.html>